

〈論文〉

唐澤富太郎の「仏教と教育」を結ぶ 「教育の宗教的基礎」の研究

—東京文理科大学教育学研究科・奈良女子高等師範学校時代の
仏教教育研究—

土 井 進

要 約

唐澤富太郎(1911-2004)は、仏教教育思想の研究、世界の教科書の研究、実物による日本教育史の研究、「教育博物館」の建設と著書などにおいて、世界的な教育学者として知られている。このような幅ひろい研究教育活動の原点となった研究視座が、東京文理科大学教育学研究科時代に設定した「教育の宗教的基礎」であった。唐澤は、幼少期に母親ゆきの親鸞への信仰生活を通して、「宗教の力」によって如何に人間が崇高に高められているかを体験した。そこで唐澤は、人生を切り開く「主体的真実」を求めて「仏教と教育」の問題を人間形成の視座から研究しようと考えた。そして、その両者をつなぐブリッジ(架橋)として設定したのが「教育の宗教的基礎」の研究であった。

キーワード

唐澤富太郎 東京文理科大学教育学研究科 奈良女子高等師範学校 親鸞 仏教と教育

1. 研究の目的

本研究は、唐澤富太郎の東京文理科大学教育学研究科時代(26歳~30歳)と奈良女子高等師範学校時代(31歳~38歳)における研究活動を研究対象としている。すなわち、唐澤が恩師篠原助市教授に勧められて取り組んだドイツの社会的教育学者P.ナトルプ(1854-1924)の研究では、自己の人生を切り開く「主体的真実」は得られないと悟った。唐澤は、東京文理科大学教育学研究科において親鸞の研究に取り組むことに研究テーマを大きく転換した。仏教を教育学の研究として成り立たせるために唐澤がとった研究方法は、「仏教と教育」を結ぶブリッジ(架橋)として、「教育の宗教的基礎」という研究テーマを導いたのであった。即ち、「仏教と教育」を、まず難解な仏教の人間観を究明し、そこから教育観を導くことによって教育学研究として成立させるという方法であった。

本研究の目的は、唐澤富太郎が「教育の宗教的基礎」という研究テーマのもと、仏教における人間観を明らかにすることによって、教育観をも明らかにするという研究方法によって、どのような仏教教育研究の成果を上げることができたのかを究明することである。

2. 研究の方法

唐澤富太郎は昭和50(1975)年に26年間勤務した東京教育大学を63歳で定年退職するにあたり、2月8日に「最終講義」を行った。それを記念して出版した唐澤富太郎著『教育的真実の探究』(ぎょうせい 全667頁)を中心資料として活用するとともに、研究方法として以下6件の著書に学び考察することにした。

- ① 唐澤富太郎著『中世初期仏教教育思想の研究—特に一乗思想とその伝統に於いて—』(東洋館出版社、全607頁、昭和29(1954)年、文学博士の学位論文)
- ② 唐澤富太郎著『教師の歴史—教師と生活の倫理—』(創文館、全368頁、昭和30(1955)年)
- ③ 唐澤富太郎『執念—私と教育資料の収集—』(講談社、全259頁、昭和45(1970)年)
- ④ 唐澤富太郎『学校週五日制時代の女性教師—成瀬仁蔵の教育理念に学ぶ—』(東京法令出版、全217頁、平成9(1997)年)
- ⑤ 唐澤博物館十周年記念誌「愚徹」編集部『愚徹—唐澤富太郎、人、そして仕事—』(唐澤博物館、全243頁、平成17(2005)年)
- ⑥ 唐澤富太郎編著『図説教育人物事典—日本教育史の中の教育者群像—』(上中下、ぎょうせい、昭和59(1984)年)

3. 唐澤富太郎の「教師」、そして「教育学」への立志

3-1. 唐澤の出自と出雲崎の風土

唐澤は、明治44(1911)年4月7日、新潟県出雲崎町に父、唐澤政七、母、春日ゆきの9人兄弟の6男、末子として誕生した。10歳年上の仲兄を師として勉学に励んだ。自らをRich Boy(富太郎)と称した唐澤少年は、14歳までの幼少年期を出雲崎で過ごした。唐澤は生まれ育った環境と人格形成について、次のように分析している。「こういう土地に生まれ、育つと人はおのずと内省的、内向的になり、またねばり強く生きねばならないことを自然から教えられる。しかし、ひとたびことを始めると、途中ではくじけたりしないという辛抱強さ、ねばり強さを持つようになるものである。」¹⁾と。実際に唐澤は、一端原稿用紙に向かうと一区切りがつくまでは、4時間も5時間も坐ったままで書き続けるのが当たり前であった。

唐澤の生家から日本海までは約800mほどである。冬の日本海の高鳴りは、一晩中ゴーと鳴り響いていた。出雲崎の厳しい風雪、怒涛逆巻く日本海の自然的風土に育まれて、唐澤は無類の忍耐力を身に付けたのであった。

2

3-2. 母ゆきから受けた最も大きな影響は“宗教の力”

出雲崎は、親鸞(1173-1262)が流された土地というゆかりもあり、さらには良寛(1758-1831)が生まれた土地がらでもあり、浄土真宗の信仰が根強い風土である。唐澤は越後のこのような仏教的風土の影響を受けて育った。子どものときから母ゆきに連れられてお寺参りをし、説教を聞いたり、ローソク入りの八角灯笼が天井からいくつもつり下がっているお堂の中を見回したりした。親鸞についての説教が始まると、信心深い町の人々は、説教のあい間に念仏を唱えて、うなずきあいながら、ありがたい気持ちを表現するのであった。名もない民衆が親鸞の教えを聴聞して、生きる力を得ている姿に接した唐澤は、幼な心に感無量になるのを覚えたという。唐澤は、「母から受けた影響のうちで最も大きな

ものは宗教の力ということであった。信仰の力がいかに人間を美しいものにするか、強いものにするかをいつわらない母の日常生活の中で感得させられたのである。」²⁾と告白している。

唐澤が母ゆきに伴われて幼少期に仏教信仰を通して親鸞にふれた原体験が、やがて唐澤を仏教と教育を結ぶブリッジ(架橋)を解明するという教育学研究に進ませることになるのである。

朝夕仏壇の前でお経をあげる母ゆきのそばで、唐澤少年は小さい手をあわせる毎日を過ごして成長した。そして何か悪いことをしたときは、この仏壇の前で胸に手を当て、懺悔せざるを得なかったという。そして、他人がどう思うかというようなことに気を使うのではなく、「もっと深い仏に対して自分の良心の問題を考える」³⁾ようになった。

そして、仏と自分との絶対的な関係において、人生を導く「主体的真実」にふれることが人間形成の核心であることを悟ったのであった。

母ゆきがただ一度だけ唐澤の学問について、ぼつりと口にしたことがあった。それは、唐澤が昭和12(1937)年東京文理科大学を卒業し、引き続き東京文理科大学教育学研究科(大学院)に残ることになった、ということをもに告げたときのことであった。「まだそんなに覚えなければならぬ字があるのか」⁴⁾とつぶやいたという。この話を筆者が唐澤と炬燵に入りながら直に聞いたとき、唐澤の帰りをひたすら待つ母の願いと、その母の情を振り切って教育学研究に立ち向かった唐澤の屹立した向学心に深く心を打たれた。生涯母を敬慕してやまなかった唐澤は、後年奈良女子高等師範学校に赴任した時、母を奈良見物に案内したのであった。

3-3. 絵かきの夢を断念し、「教師」の道を志す

唐澤が5歳の時、10歳年上の兄は新潟師範学校に入学した。この兄は東京高等師範学校も卒業しており、出雲崎で高等教育を受けた只一人の人物であった。唐澤はこの兄を精神的指導者とし、深く信頼していた。その兄が、絵かきになりたいという唐澤少年に語った言葉は、「横山大観位にならなければ飯が食えない」⁵⁾の一言であった。これまで父からも母からも一度として言われたことのない夢を否定する言葉であった。唐澤少年は愕然とした。しかし、精神的指導者の一言に従うよりほかなかった。

この青春の蹉跌は、16歳の時の出来事であった。下の表1. に示したように、唐澤は14歳で郷里出雲崎を出て、東京府豊嶋師範学校本科第一部に入学した。それは、豊嶋師範では好きな絵の勉強ができ

表1. 唐澤富太郎の学歴と取得した教員免許状

年	年齢	唐澤富太郎の学歴と取得した教員免許状
大正7年(1918)	6	新潟県三嶋郡出雲崎町立出雲崎尋常小学校入学
大正13年(1924)	12	新潟県三嶋郡出雲崎町立出雲崎尋常高等小学校入学
大正15年(1926)	14	東京府豊嶋師範学校本科第一部に入学
昭和6年(1931)	19	同校を卒業、小学校本科正教員免許状を取得
昭和6年(1931)	19	東京高等師範学校文科第一部に入学
昭和9年(1934)	22	同校を3年で修了
昭和9年(1934)	22	東京文理科大学教育学部に入学
昭和12年(1937)	26	同校を卒業 師範学校、中学校、高等女学校、修身教育公民免許状を取得
昭和12年(1937)	26	東京文理科大学教育学研究科に入学
昭和17年(1942)	30	東京文理科大学教育学研究室勤務のため同大学教育学研究科を退学

る、ということを知らされたからであった。絵の勉強への夢に胸を膨らませて帰省した唐澤少年に、兄から語られた厳しい言葉は、彼をどん底の苦しみに落としたが、また不屈の精神に燃えるのであった。

3-4. 「教師」を志した原点は代用教員、新保民八の圧倒的な感化力

苦悩のどん底の日々であって、自己の適性と進路を模索し続けた唐澤が、一筋の光明を見出した。それは、新潟県三嶋郡出雲崎町立出雲崎尋常小学校3年・4年生の担任であった新保民八(1901-1958)の存在であった。絵かきがだめなら新保のような立派な教育者になりたい、という気持ちにかられて「教師」、そして「教育学」に志を立てたのであった。

唐澤は小学校時代の代用教員、新保民八のことを教育的天才であったと言ってはばからない。唐澤にそのような圧倒的な影響を与えた新保とはどのような人物で、どのような教育をしたのであろうか。新保は、明治34年新潟県出雲崎に生まれ、能生水産学校を卒業した後、校長からの懇請によって、母校出雲崎尋常高等小学校において2年間代用教員として勤務した。ちょうどその2年間の担任が新保民八であった、という幸運に唐澤は恵まれたのであった。正に理想の教師との出会いを体験していたのである。

新保のヒューマニズムに唐澤が最も感化された出来事は、次のようなものであった。I君という父親が漁師の同級生がいた。彼は父といっしょに舟に乗って徹夜の漁に行き、帰ってきて学校へ出てくるので、教室でつい居眠りをした。それを見た新保は、普通なら叱るところをあべこべに、「君は実に偉い。お父さんの手伝いを徹夜で一生懸命やってきたのだから眠いのは当たり前だ」⁶⁾と言って褒めたという。こういう教師の態度がクラス全体のヒューマニズムを養い、唐澤たちのクラスは大きく成長したという。唐澤たち同級生は後年、「新保民八先生頌徳碑」を建て、唐澤が撰文した。現在出雲崎町商工会館の入り口に置かれている。

3-5. 東京府豊嶋師範学校時代の「師範タイプ」へのレジスタンス

唐澤は、出雲崎から希望・大志を胸に14歳で東京府豊嶋師範学校に入学した。師範学校は中学校よりも絵を描くことを重視していると聞かされたので、唐澤にとってはこの上ない教育環境であると思われる。師範学校に大きな魅力を抱いて入学したのであった。しかし、師範学校の雰囲気になじめない、唐澤は「師範タイプ」とよばれる教師像に染まらないように徹底して抵抗(レジスタンス)する5年間を送った。

唐澤は豊嶋師範学校の様子を次のように振り返っている。「入寮してしばらくたつと、何となく嫌な気分が満ちているのを感じずにはいられなくなった。青年らしい将来に対する夢や無限の可能性に向かって突進しようという意気込みが感じられないのみか、何か卑屈な気分さえただけのように思えた。というのは当時師範生には1か月13円50銭の府からの援助があり、その他、靴、洋服、帽子などの支給もあったが、これが生徒の気持ちを卑屈にさせた一つの原因であったように思われる。“頭をたたけば官費官費の音がする”などと歌われたりしたが、何か自分を卑下するような雰囲気がただよっていた。一方、学校の教育は型にはまっただけで、形式的、偽善的要素のあることがだんだん感じられてきた。」⁷⁾という具合で、次第に向学心を失うに至った。

「一般に師範タイプと云えば着実性、真面目、親切などがその長所として評価される反面、内向性、裏表のあること、すなわち偽善的であり、仮面をかぶった聖人的な性格をもっていること、またそれと関連して卑屈であり、融通性のきかぬということ」⁸⁾が特色として見られた。

その後、東京高等師範学校で石山脩平教授、東京文科大学で篠原助市教授の入魂の指導を受けるに至って唐澤は、水を得た魚のように猛烈な向学心に燃えて、ドイツ語の原書に取り組んだ。

4. 人生を導く「主体的真実」を求めて「教育の宗教的基礎」を探究

唐澤は、東京文理科大学教育学部の卒業論文として、篠原助市教授の指導のもと「ナトルプの社会的教育学」について探究した。しかし、ドイツ哲学では人生の「主体的真実」にふれることはできないと悟り、東京文理科大学教育学研究科に進んで研究テーマを「教育の宗教的基礎」と設定し、親鸞の研究に打ち込んだ。そして、次の表2.のように、「親鸞の人間観と教育—鎌倉時代の新仏教と教育理念—」と題する論文を6回にわたって毎月、東京文理科大学教育学会編『教育学研究』に発表した。大学院時代に6回も連続して論文を発表したというところに、唐澤の親鸞研究への情熱が如何に強いものであったかが伺われるのである。

表2. 東京文理科大学教育学研究科時代の親鸞の教育学研究

年 月 (年齢)	論 文 名	発 行 誌
昭和13(1938)年12月(26歳)	親鸞の人間観と教育—鎌倉時代の新仏教と教育的理念—(一)	東京文理科大学教育学会編『教育学研究』
昭和14(1939)年2月(27歳)	親鸞の人間観と教育—鎌倉時代の新仏教と教育的理念—(二)	東京文理科大学教育学会編『教育学研究』
昭和14(1939)年3月(27歳)	親鸞の人間観と教育—鎌倉時代の新仏教と教育的理念—(三)	東京文理科大学教育学会編『教育学研究』
昭和14(1939)年4月(27歳)	親鸞の人間観と教育—鎌倉時代の新仏教と教育的理念—(四)	東京文理科大学教育学会編『教育学研究』
昭和14(1939)年5月(27歳)	親鸞の人間観と教育—鎌倉時代の新仏教と教育的理念—(五)	東京文理科大学教育学会編『教育学研究』
昭和14(1939)年6月(27歳)	親鸞の人間観と教育—鎌倉時代の新仏教と教育的理念—(六)	東京文理科大学教育学会編『教育学研究』

唐澤は、ドイツ哲学を学んだがどうしてもこれに満たされないものがあつた、という。それはドイツ哲学がどんなに偉大であっても、真理をただ客観的に概念によって把握するに過ぎないからであった。唐澤はどうしても自分が主体的に生きていくことに対して、これを導いてくれるような「主体的真実」を求めたかったのである。このような「主体的真実」を唐澤は、幼少時における母ゆきの親鸞の信仰生活の中に感得していた。また、唐澤自身が、仏と自分との絶対的な関係において、自己を見つめるところに人間形成の核心があることを見出し、ここに人生を導く「主体的真実」を体得する道があると悟ったのであつた。ここにドイツ哲学を去って「仏教と教育」の道へ進む決断がなされたのであつた。

4-1. 「仏教と教育」を結ぶブリッジ(架橋)としての「教育の宗教的基礎」の視座

唐澤は「仏教と教育」を結ぶ研究のブリッジ(架橋)は、仏教の人間観・教育観を究明することである、と学位論文において次のように論述している。

「日本仏教思想のうち如何に深い人間性の把握が示され、その中に如何に深い人間形成理念が秘められてあるかといふことである。何となれば、仏教は本来教育的意図を以て形成されているものであり、単なる認識論的なものを超えて、実存哲学的なものであるからである。」⁹⁾ としている。そして、親鸞・道元・日蓮のような仏教思想家に迫るには、飽くまでも内面的に思想的に把握することが大事であり、これらの仏教者の思想を把握するに当たって、その焦点を唐澤は人間観と教育観においた。何故ならば唐澤によれば「人間を対象とし人間をして人間たらしめる教育の論理的出発点は、正に人間その

ものの徹見に始まるといはなければならない。それ故にわれわれは教育の出発点に於いて、どうしてもその根底に、人間を如何に見るかといふことを深く洞察して見なくてはならないであらう。』¹⁰⁾と述べている。

唐澤が自己の「主体的真実」を求めて「仏教と教育」の研究に没入したのは、「仏教は本来教育的意図を以て形成されているものであり、単なる認識論的なものを超えて、実存的なものであるから」に他ならないと受け止めたところにある。そして、唐澤は教育の論理の出発点は「人間を対象とし人間を人間たらしめる」ことであるから、「人間そのものの徹見」が教育の出発点になければならないと把握した。こうして唐澤は、親鸞・道元・日蓮の人間観を究明することを、「教育の宗教的基礎」と位置付けて研究に邁進したのであった。

4-2. 「教育の宗教的基礎」の視座から究明した『親鸞の人間観・教育観』の研究

6回にわたって発表した学術研究の成果が、唐澤富太郎著(1942)『親鸞の人間観・教育観』として処女出版された。発行元は郷里出雲崎の出身者、長谷川巳之吉の経営する第一書房であった。本書の序文において、唐澤はまず初めに親鸞の宗教的境地について次のように考察している。「人間のもつ限界の最後にまで徹し、苦悩と矛盾の葛藤のただ中に人間の真相をつきつめた親鸞は、自己を、内に主体的に超越することによって、人間存在の根源に絶対の世界を見出した。かくの如く親鸞は徹底的なる自己否定の底に絶対的な弥陀の慈悲の世界によって肯定せられたのであった。否彼自身の具体的な体験よりすれば、これ等の世界はすべて自己の力によって為したものではなくすべてが弥陀にはかられたるものであるとして信知せられたのである。ここに我々は親鸞的世界が如何に徹底せる他力的なる思惟をみだしてあるか、またそこに肯定せられた現実が如何に深き意味を有ってあるかに驚かざるを得ないであらう。』¹¹⁾

この思索に見られるように、唐澤は教育学の視座から仏教的世界をどう表現するか心に砕いている。親鸞が「苦悩と矛盾の葛藤のただ中に人間の真相をつきつめ」た教育的世界は、そのまま「絶対的な弥陀の慈悲の世界によって肯定」せられているという仏教的世界へと通底していると把握したのである。

次に唐澤は、親鸞の人間観について次のように究明している。「教育の人間観的基礎が問題になる私には、一体親鸞の如き宗教家が人間を如何に観じ行得してあるかといふことが中心的な関心であった。……彼の到達せる宗教的境地から、絶対他者決定的人間といふ謂わば上からの彼の宗教的人間観を究明し、むしろこれとは逆に愚禿という謂はば下からの人間観を絶対的自己否定的人間といふ方面より考察してある。』¹²⁾即ち、唐澤は親鸞の人間観を2面の相互関係において把握した。つまり、絶対他者決定的人間観と愚禿という絶対的自己否定的人間観の両側面の相互関係から、親鸞の人間観を究明したのである。

6

次に唐澤は、親鸞的教育観が如何なるものであったかについて、「絶対他者規定的教育的世界ともいふべき同朋同行」¹³⁾という考え方が、親鸞的教化の世界を顕現するに至ったことを論述している。唐澤は親鸞の愚禿に因んで、自らを「愚徹」と号していた。その心は愚に徹して賢をも超えるという願いであった。本書の執筆を終えた唐澤は、次のような深い反省と次への飛躍を誓っている。「この小著が如何に親鸞的世界にくひ入ることの浅きか、親鸞の体験の世界の愈々深きことを感ぜしめらる々自分には、この点を誰よりも強く苦しまざるを得ない。……私は必ずや、今後、私自身の体験の深まりと、今日この日よりの情熱的研鑽及び説かんとして説き得ざる親鸞に対する追慕の念を以て、親鸞の世界に潜む無限的教育的真理」¹⁴⁾を究明し、学術的著作として公表する、と毅然たる誓いを立てている。

4-3. 唐澤富太郎の仏教教育研究は「人間観・教育観」の探究

唐澤は、処女作『親鸞の人間観・教育観』において、教師教育研究の課題は教育者の魂に深くふれ、その人物の全体像を捉えて、人間観・教育観を明らかにすることである、という研究方法を確立した。この研究方法に対する確かな手応えを確信した唐澤は、その後道元や日蓮をはじめとする多くの仏教者についても、深い人物像の把握に基づいて人間観と教育観を明らかにしている。

唐澤(1984)は、「日本教育史のなかの教育者群像」という副題の下に『図説教育人物事典』上中下を編纂執筆した。上巻では98名、中巻では201名、そして下巻では149名の教育者について、肖像画や著書の写真を取り入れて人物像が彷彿とするように執筆している。そのうち仏教者について唐澤が担当した人物は、表3.の通りである。

表3. 『図説教育人物事典』¹⁵⁾において唐澤富太郎が執筆した仏教者

人物事典の章立て	仏教者	生年・没年	唐澤富太郎が把握した人物像
古代の教育者	聖徳太子	574-622	日本文化の祖、日本教育の源流
	行基	668-749	民衆教化と社会事業に尽くした法相宗僧侶
	最澄	767-822	日本天台宗の開祖、僧侶教育に尽くす
	空海	774-835	僧侶教育と綜芸種智院
	空也	903-972	民衆教化に尽くした“市聖”
	良忍	1072-1132	融通念仏による民衆教化
中世の教化者	法然	1133-1212	古代から中世への分水嶺に立つ浄土宗の開祖
	栄西	1141-1215	持戒と慈悲心に富んだ建仁寺の創設者
	明恵	1173-1232	華嚴宗の復活と不退転の修業
	親鸞	1173-1262	民衆教化と在家仏教への展開
	道元	1200-1253	僧堂における僧侶教育
	日蓮	1222-1282	法華経行者
	一休	1394-1481	民衆教化に尽くす
近世の教育家群像	蓮如	1415-1499	浄土真宗中興の祖
	良寛	1758-1831	たくまざる社会教化、子どもの友
教育理論の形成者	福島政雄	1889-1976	仏教的信仰に裏付けられた教育学の確立
中等教育に尽くした教育者	渡辺海旭	1872-1933	学徳兼備の芝中学校の名校長

4-4. 唐澤富太郎が「人間観・教育観」の究明を通して形成するに至った教師観

唐澤は自分が教育を受けた体験、すなわち代用教員の新保民八先生や石山脩平教授、篠原助市教授との深い人間的ふれあいの経験、ならびに仏教の人間観・教育観の研究を通して、教師に求められる資質能力は、「人間の核心のところで触れ合える教師」である、と主張している。

「戦後、専門職者としての教師像が教師に対して要求されたことは、それだけ教師が近代化されたことを示すことはいままでのない。しかし、専門職者としての教師としてのみではなく、もっと教職ということに対する使命感を自覚し、個性的であり、恐れることなく生徒の前に自己をさらけ出すことができるような教師、そして人間の核心のところで触れ合うことのできるような教師とならなければならないことが要求されるのである。」¹⁶⁾と述べている。ここに示された教師観は、今日求められている高度専門職としての教師像に通ずるものがあると言えよう。

5. 唐澤富太郎の奈良女子高等師範学校時代の仏教教育研究

5-1. 奈良女子高等師範学校教授に就任(昭和17年9月)した経緯

唐澤は、『親鸞の人間観・教育観』(30歳)という著書が機縁となって、奈良女子高等師範学校の日田権一校長(東京高等師範学校の卒業生)から招かれ、同校の教授になった。これには次のような経緯があったという。日田校長が乙竹岩造先生のところへ唐澤の採用を依頼に来られたとき、乙竹は唐澤には何も言わないで、「彼は行かないだろう。」と断った。しかし、乙竹は一か月ほどしてから唐澤を呼び、「君はそれでいいだろうね。」と言われた。唐澤は「相談する人がありますから、ちょっとお待ちください。」と言って辞した。

務台理作先生は「君はなぜ奈良へ行かないのか。東京にはもう仏教を指導する人がいないから奈良へ行きなさい。」と忠告してくださった。更に伊東延吉文部次官は「君は“唐沢さん”“唐沢さん”と言われるような人間にならなければならない。“ああ、あの人は今奈良か”といわれるような人間にならなければならない。」と言って激励してくださった。

また教学局の近藤寿治局長は、「君は行かない、行かないと言うけれど、東大の連中は行きたがって大騒ぎをしている。人間というものは、例えば石炭は千尺の地中にあっても掘り返すじゃないか。況や君は頭を地上に出している。奈良へ行ったからといって、いつまでもいなければならないということはない。しっかり研究さえしていればいつでも東京へもどってくることもできる。」¹⁷⁾と言ってすすめられ奈良へ赴任する決心をしたのであった。

5-2. 奈良における仏教の追体験的な研究

唐澤は、奈良での7カ年の生活において極力古寺を訪ね、仏像をはじめ仏教芸術にふれて、それが作られた当時の精神はどのようなものであったかを思索しつづけた。また、法隆寺、東大寺、長谷寺、薬師寺、高野山などを訪ねては、その寺の行法を見学し、過去の僧侶教育がどのようなものであったかを追想した。また各宗派の宗風をよく伝えていると思われる宗教家の門を叩き、その高説に接し、疑義をただし、そのことを通して祖師の宗風を偲ぶことによって、その思想的な把握に有力な助けを得た。

このような古寺巡礼のなかで、唐澤が特に印象深かった人物として、「高野山の天徳院に、金山穆詔老師を訪ね、教えに接したこと、法隆寺の佐伯定胤師の講話を聞いたり、時には薬師寺の当時の管長橋本凝胤師から『観心覚夢鈔』などの講義を、現在の管長高田好胤氏と2人きりで聞いたり、また東大寺

表4. 奈良で唐澤富太郎が訪ねた高僧と収集した教育資料

古寺探訪	教を乞うた宗教家	日本人の生活文化を示す教育資料(唐澤博物館所蔵)
法隆寺	佐伯定胤師	○百万塔
東大寺	2月のお水取りの行法に唐澤が只一人参加を許される。	○東大寺転害門の壁板(部分) (幅25cm 長さ178cm 厚さ3cm 鎌倉時代) ○香合(東大寺古材 光明皇后1,200年記念) ○東大寺古材で作った衝立(聖武天皇勅願一切経) ○東大寺大仏蓮弁毛彫拓影
薬師寺	管長橋本凝胤師 高田好胤師	○短冊掛け(薬師寺古材 鎌倉時代)
極楽院		○土瓶敷(檜の垂木利用)天平時代古材) ○瓦
高野山天徳院	金山穆詔老師	

の二月のお水取りの行法には灯火管制という厳しい戦争中のことではあったが、一人だけ行法に参加させてもらったりした。」¹⁸⁾ ことを挙げている。

唐澤は奈良女子高等師範学校に在職した7年間に、古代仏教のみならず中世仏教の遺産にも接して仏教哲理の理解を深めることができたことは、極めて有益なことであった。唐澤が奈良の古寺を探訪し、教えを乞うた宗教家は前頁の表4.の通りである。また、天平時代や鎌倉時代の古材(表4.)を入手できたときは、実物資料としての価値を高く評価し、一つ一つを大事に収集した。それらの実物が、7万点もの教育資料で構成されている唐澤博物館の宝の一つとして大切に保存されている。

5-3. 奈良女高師時代に「人間の芯」を作る

唐澤は、教育学研究において次のことを根本精神としている。それは、「研究には飛躍があってはいけないということであり、すなわち、研究は内からの積み重ねでなければならないということと、研究というものはいかなる場合にも自己の内的脱皮でない限り真の深まりはないと思います。流行のみを追っていたのでは、ものにならないんだということを繰り返したいと思います。」¹⁹⁾ と、厳しく指摘している。唐澤がこのことを強く主張するのは、戦時中には猫も杓子も『万葉集』だ『古事記』の研究だといって騒いでいた連中が、終戦になるや否やそれまでの研究テーマを弊履のごとくに棄て去って、アメリカのデューイなどの研究に飛びついて行った姿をしかと(聡と)見届けてきたからである。唐澤は呆然とするほかなかったという。あれだけ戦時中に努力をして日本の文化についての研究をしてきたのに、少しも研究業績としてまとめないうちに、つぎつぎと調子のよい流行の研究テーマに乗り換えていったからである。唐澤はこうした調子のいいアメリカ研究者の群れから一人離れ、戦時中も戦後も仏教の研究一筋に没入した。地味な研究テーマに取り組んでいる唐澤には、僅かな俸給以外は一銭の副収入も入らなかった。近くにいたある教官などは、「あなたは頭が少し変ではありませんか」²⁰⁾ とからかったという。

景気のいい友人の派手な活躍をそばで見ながら、あえて仏教研究に沈潜した唐澤は、「この寂しさの不景気さを堪え忍んだことは、私の人生で、人間を作る上に大いにためになった。」²¹⁾ と謙虚に受け止め、教育界における王者的風格を呈するに至っている。唐澤にとって奈良女高師時代の7年間は、人間を作る上での鍛錬の時代であり、この試練の時代に学位論文の執筆が進められていったのであった。唐澤は大学院生の筆者によく、「5寸釘を打て!」とあって激励してくれた。唐澤の生涯にわたる教育学研究者としての魂は、奈良女高師時代の寂しさの不景気さを堪え忍んだところに形成されたものと考えられる。

5-4. 奈良女子高等師範学校時代の唐澤富太郎の教育研究業績

唐澤は、昭和17年9月1日に奈良女子高等師範学校教授に任ぜられるや、10月には奈良特設幼稚園保母養成所講師となり、19年には大阪臨時教員養成所講師も務めている。戦後昭和21年9月に「教員適格」と判定されるや、近畿南部地区学校集教職員適格審査委員長を務めた。

奈良女高師時代7年間の研究業績は次の表5.の通りである。唐澤富太郎(1942)『親鸞の人間観・教育観』が第一書房から処女出版された翌年、早くも唐澤富太郎(1943)『親鸞・道元・日蓮』が日本教育先哲叢書として出版されている。このことは親鸞の研究と並行して道元と日蓮の研究が進められていたことを示すものである。そして、この3人の仏教者の教育思想の研究が奈良時代にまとめられ、これに唐澤富太郎(1948)「聖徳太子の人性観と教化」などの研究成果を総合して、苦しみ抜いた果てに学位論文、唐澤富太郎(1954)『中世初期仏教教育思想の研究—特に一乗思想とその統に於いて—』として

表5. 奈良女高師時代の唐澤富太郎の教育研究業績

年月(年齢)	著書名等	出版社等
昭和18(1943)年3月(31歳)	『親鸞・道元・日蓮』(日本教育先哲叢書)	文教書院
昭和19(1944)年3月(32歳)	「現代教育における中世的なるもの」	日本諸学研究報告 文部省教学局編纂 『教育学論集』
昭和21(1956)年10月(34歳)	人間形成の宗教的基礎としての愛の哲学	奈良共同印刷出版
昭和22(1947)年(35歳)	『親鸞の世界』	弘文堂書房
昭和22(1947)年(35歳)	「新教育理念の基礎的考察—特に人間性の探求を中心にして—」	(講演記録)
昭和23(1948)年9月(36歳)	「聖徳太子の人性観と教化」	『教育学研究』目黒書店
昭和23(1948)年3月(36歳)	「女子総合大学と「教育学部」	奈良女子高等師範学校(新聞)
昭和24(1949)年1月(37歳)	『ナトルプの社会教育学』	黎明書房(学位論文副論文)
昭和24(1949)年6月(37歳)	『人間性・運命・宗教』	黎明書房

結実することができたのである。篠原助市教授の指導の下で取り組んだ唐澤富太郎(1949)『ナトルプの社会教育学』は、学位論文の副論文としてそえられた。

6. 奈良女子高等師範学校における「教師」としての唐澤富太郎

6-1. 新進気鋭の若い瘦单身軀赴任の教授

唐澤の奈良女高師での最初教え子となった清美佐保は、唐澤先生との出会いを次のように述べている。「唐澤先生が奈良女高師に来られた昭和17年秋、私は文科3年の学生だった。唐澤先生がその年に処女出版された『親鸞の人間観・教育観』の本に感銘を受けた日田権一校長に懇望されての就任との事だった。東京からの新進気鋭の若い教授が、その著書を携えての瘦单身軀赴任との事、迎える学生達はやや、緊張気味だった。……」

私は、己自身の在り処に迷う年頃で、唐澤先生の仏教からの授業に、それまでよりもっと大きく深い物を感じ求めていた。“絶対的的自己否定”“自然法爾”などの語を茫々と聞き呟きながら、哲学的思考の糸口を少しずつ開いて頂いた気がする。

私が先生の授業を受けたのは昭和18年9月の戦時特別繰り上げ卒業の時迄で、そのうちの最後の教生実習期間を除くと、正味は僅か半年ばかりに過ぎなかった。しかし先生の学問への思考の態度・方法・方向などは身の芯に浸み、その後の私の人生の色々な場面でも私を内側から支え、励ましてくれた。」²²⁾

31歳の独身教授として、唐澤は奈良女高師の教壇に立った。学生たちも緊張したことであろうが、唐澤もまた研究成果を基にした「教育学」講義ノートの準備に余念がなかった。唐澤の講義を受けた第1回生(昭和17(1942)年)の印象に残った言葉が“絶対的的自己否定”“自然法爾”であった。筆者が昭和43(1968)年に大学1年の時に聞いた唐澤の講義で、今も心に残っている言葉は、“聖徳太子の王者的風格”であった。時代は変わっても唐澤が心血を注いで研究した成果からほとぼしり出た言葉が、学生の心を動かし長く心に刻まれていくものであることが共通しているといえよう。

6-2. 臨教家政科35名のクラス担任としての唐澤富太郎

昭和20年の春、奈良女高師の門をくぐった殿元美代子は、戦時下の学生生活について、次のように述べている。「授業も休講状態で、近郊の農家に出かけて農作業を手伝ったり、食糧難を自給自足での

りきるために山地の開墾に従事したりの日が続き、遂には自宅待機ということで帰省する者の多い中で終戦を迎えました。

やっと授業を受ける態勢に入ったのは2学期からでした。私たち臨教家政科35名のクラス担当は唐澤教授でした。以後卒業までお世話になりました。何はさておき、やっと学生らしい授業が受けられるとうことは嬉しいことでした。家政学のほか、物理、化学、生物があり、更に国文学、英語、哲学、心理学、教育学といった科目は、女学校時代学徒動員で殆ど授業を受けられなかった私達の知的欲求を大いに満たしてくれました。]²³⁾

この文章には、戦争が末期を迎えた昭和20(1945)年の学生生活が活写されている。学生たちは勤労奉仕に農村に出かけたり、学徒出勤を命ぜられ、舞鶴海軍工廠へ行く者もあった。教師たちは国防服、ゲートル姿で激励に廻ったのであるが、その中に勿論、唐澤教員の厳しい顔もあった。

6-3. 奈良女高師時代の教育活動—唐澤の教育学講義—

殿元美代子は唐澤の教育学の講義の様子を次のように回想している。

「まだ30代半ばでしたでしょうか、若々しいお姿で教壇に立たれ、黒板にサラサラと横文字を板書され、ノートを取るのに苦労しました。プラトン、シュプランガー、ペスタロッチ、キルケゴール、ゲーテ、トルストイ、ヘーゲル、そしてキリスト教から更に日本の仏教に移り、親鸞、道元、日蓮へと、古今東西にわたる広範囲な知識と深い思索の込められた内容でした。その時教わった「エロスとアガペー」「悪人正機」はどういうものか、長く私の心に残りました。……その後書かれた『新教育理念の基礎的考案』の小冊子は、人間の形成にたずさわる教育者としての心構え、方向性を説かれたもので、テキストとして使われました。]²⁴⁾

奈良女高師時代は専ら仏教教育思想の研究に没頭してきた唐澤であったが、戦後の新教育が始まるやこれをどのように受け止め、どのように実践していけばよいか、について教師も国民も混乱していた。このような時代に対応する見解を披歴することが、教育学者唐澤に求められた。そのような期待に応えるものとして行われた講演が、昭和22(1947)年「新教育理念の基礎的考察—特に人間性の探求を中心にして—」であった。この講演記録は現在残っていないので詳しく紹介することができない。しかし、唐澤が仏教研究において人間観の探究を基本としたように、新教育においても教育者が人間性の探求を中心にして、そこから新教育の実践の方向性を説いたのではなかろうか。

6-4. 唐澤富太郎の夫婦による学生の育成—同朋同行—

前述の殿元美代子は、唐澤の新婚家庭に押しかけて、遠慮なく質問したことを次のように振り返っている。「先生のお宅が寄宿寮に近かったこともあり、休日などには私ども寮生が、3人、4人と連れだってよく先生宅に押しかけました。ご結婚されて間もないということを聞いていながら、また先生にとっては1時間でも惜しい、思索や執筆の貴重なお時間を妨害して、さぞ御迷惑であったろうと反省したのはずっとあとになってからのことで、まことに若い者は無知で勝手なものでした。そんなある日、私は先生に質問したことがあります。それは誰でも青年期にぶつかる問題“人間如何に生くべきか”ということでした。私は不躰にもおたずねしました。『先生の人生の指標は何でしょうか?』と。先生は一寸考えられて、『平凡ということですね』とおっしゃいました。日夜学問の世界にあった、人間の究明に心血を注いでおられる先生が平凡であるわけがありません。私は先生の顔を見つめました。先生はすました顔をしておられます。そして“ハツハツハツ”と笑われました。気負いこんだ私をからかわれたのかとそのとき思いました。その後いろいろ考えてみました。“非凡なる平凡”を目ざしておられたのか、

あるいは“愚禿親鸞”の自己否定の謙虚さをこめられたのか、答えは出ませんでした。

クラス担任としての先生は、また色々なイベントも企画してくださいました。昔のアルバムを開くと、その折々の写真がなつかしさをそそります。赤膚山に陶器作りの見学に行ったこと、吉野山をたずね竹林院に宿をとったこと、京都大原の里でしぐれにあったことなど。中でも大型の一枚は、クラス全員先生のお宅に招待され、先生、奥様を囲んで撮った記念写真です。学生時代にタイムスリップした感慨ひとしおです。』²⁵⁾

結婚間もない唐澤夫妻が、若い学生たちを家庭に招き、率直な質問に応えながら談笑された様子が行間からよく伺われる。唐澤と学生との師弟関係は、上下の関係ではなく、同朋同行の関係であった。唐澤は教えるだけでなく、よく学生から話を聞きメモをとるのが常であった。筆者が学生時代に教育博物館を訪ね、一日中筆録の手伝いをするのがあったが、昼食と夕食はいつも奥様の手料理であった。唐澤の研究に対して最大の理解と協力を惜しまなかったのが奥様であったと考えられる。

6-5. 唐澤富太郎の教え子の卒業後40年の教職生活

前述の殿元美代子が奈良女高師卒業後、40年間の教職生活の支えになった言葉は、唐澤の「愛こそ教育の原点」という声であったと、次のように述べている。「昭和23年無事卒業しました。当時の日本は、敗戦後の混乱、窮乏からなんとか立ち直り、新しい日本を作ろうとする胎動期でした。私たちも教師の卵として、未来に夢と希望を抱きそれぞれの任地に向かいました。私も大阪の高校に職を得、その後地元高校への転勤を含めて40年間教職にありました。その間の社会の変動はめまぐるしいものでした。価値観の多様化、物質主義、放縦、受験地獄、学園紛争、暴力といじめの横行等々。教師たちはその対応に追われ、試行錯誤、模索を繰り返しました。私も何度か失敗したり、打ちのめされたりしました。そんなとき、私の心に奥深く流れる清冽なせせらぎの音を聞きました。それは唐澤先生の『愛こそ教育の原点』という声でした。日本が世界がいかに変わろうと、人間形成の根本に必須の物は愛であるという普遍性。これを心のより所として、初心に帰り、新たな勇気を得て歩みつづけた40年であったと思います。』²⁶⁾

この教員の40年の教職生活に絶大な影響を与えた「愛」について、唐澤は戦後間もない昭和20(1945)年10月に発行した『人間形成の宗教的基礎としての愛の哲学』(全214頁、奈良共同印刷出版)の序文において、次のように述べている。

「幾多惨烈なる人生の矛盾にも拘わらずそれに対して深き解明を与へ豊富なる光明を賦与してくれるものは愛である。まことに愛こそは如何なる自己否定にもかかわらず新しき生を蘇生させ、耐え難き苦難にあっても挫折することなく、絶望のどん底においてすら仄かなる希望の輝きを与えてくれるであらう。』²⁷⁾

12

唐澤の人生もまた、このような「愛」によって切り拓かれてきたものと考えられる。

7. 結 語

唐澤富太郎は、絵描きになりたいという一途な夢と希望が砕かれ、苦悩のどん底から出雲崎尋常小学校3年・4年の2年間担任だった代用教員新保民八のような立派な「教師」になろうと志を立てて、教育学の道に進んだ。東京文理科大学(筑波大学、東京教育大学の前身)で篠原助市博士の指導のもと新カント学派のナトルプの研究に取り組み、ドイツ語の原書に没頭する日々を送ったが、そこからは人生を導く「主体的真実」の核心にふれることはできなかった。それで東京文理科大学教育学研究科(今日

の大学院)に進み、親鸞の研究に取り組むために研究テーマを「教育の宗教的基礎」と定めた。仏教は本来教育的意図をもって説かれたものであるが、宗教としての仏教をそのまま教育の研究として取り扱うことは適切ではなかった。「仏教と教育」を結ぶブリッジ(架橋)をどのように設定するかが難問であった。この難問を解決するために、唐澤は仏教思想に秘められている人間形成理念を「人間観」として把握し、これと「教育観」を結合することによって、仏教の教育学研究の道を可能にしたのであった。

仏教にゆかりの深い奈良の地において、唐澤は仏教思想の追体験的理解に努め、人間形成の核心に迫ろうとした。教育学研究科5年間と7年間の奈良での仏教教育研究への沈潜の期間は、正に「5寸釘を打つ」鍛錬の日々であった。この試練を乗り越えた唐澤に、昭和29(1954)年に文学博士の学位が授与されたのであった。当時はまだ教育学博士の学位はなかった。

謝 辞

筆者は淑徳大学人文学部で4年間「生涯学習概論」を担当し、平成26年～平成29年に受講した101名の学生たちと共に、唐澤博物館を4回訪問することができた。実物にふれた学生たちの清新な感動に触発された筆者は、今後のライフワークを「唐澤富太郎の『教育博物館』における実物教育の研究」と定めることとした。淑徳大学での4年間の特任教授の期間に、向学心に燃えた学生と共に教育研究に取り組めたことによって、多大な研究成果を上げることができた。ここに淑徳大学に深い感謝の念を捧げて擲筆したいと思う。

【注・引用文献】

- 1) 唐澤富太郎『教育的真実の探究』ぎょうせい、1975、p.4
- 2) 前掲書1) pp.7-8
- 3) 前掲書1) p.8
- 4) 前掲書1) p.8
- 5) 前掲書1) p.15
- 6) 唐澤富太郎「新保民八一圧倒的な影響を受けた代用教員」唐澤富太郎編『図説教育人物事典』中、ぎょうせい、1984、p.91
- 7) 前掲書1) p.123
- 8) 唐澤富太郎『教師の歴史』創文社、1955、p.55
- 9) 唐澤富太郎『中世初期仏教教育思想の研究—特に一乗思想とその伝統に於いて—』東洋館出版社、1954、p.13
- 10) 前掲書9) p.23
- 11) 前掲書1) pp.61-62
- 12) 前掲書1) p.62
- 13) 前掲書1) p.62
- 14) 前掲書1) p.63
- 15) 唐澤富太郎編著『図説 教育人物事典—日本教育史の中の教育者群像—』上中下、ぎょうせい、1984
- 16) 前掲書15) p.4
- 17) 前掲書1) pp.75-76
- 18) 前掲書1) p.77
- 19) 唐澤富太郎『執念—私と教育資料の収集—』講談社、1970、p.237
- 20) 前掲書19) p.150
- 21) 前掲書19) p.150
- 22) 唐澤博物館十周年記念誌編集部『愚徹—唐澤富太郎、人、そして仕事—』唐澤博物館、2005、p.142

- 23) 前掲書 22) p.145
- 24) 前掲書 22) pp.145-146
- 25) 前掲書 22) p.146
- 26) 前掲書 22) pp.146-147
- 27) 前掲書 1) p.51